

2013（平成25）年度 京都大学 入試問題 文系 第1問 解答例

問一

(ア) 変哲 (イ) 代償 (ウ) 粗野 (エ) 報酬 (オ) 迷妄

問二

筆者は、「麦刈り」の絵の、自然と深く結合し、全体の生命を形作り、充足しきった農民たちの姿に、勤労働員の労苦を通して経験した生命の充実感と共通する感覚を抱くということ。

* 勤労働員での「生命の充実の感じ」の感覚から「麦刈り」の絵に「共感をよせる」というのであるから、絵の「生命」「充足しきった」の要素が解答に必須である。

問三

筆者は、「麦刈り」に描かれた自然の中の人間の生に関わるものに共感したが、それが労働以上のものであるという意識はなかったので、駐車場の若い男の運転技術は感嘆すべき労働であったのに、労働に値しないと感じてしまったから。

* 傍線部（B）の次段落「すると、～あすこ（絵）にはなにか労働以上のものがあつたわけだ」を踏まえれば、解答内容は明らかである。絵の農民たちの「労働（以上のもの）」に共感してしまった結果、筆者は本来の「(賃金)労働」を見ているのに「これが一体労働と言えるだろうか、と」感じてしまった。労働を労働ではないと錯覚してしまったのである。そこから筆者は「(そう)すると～」と推論し、実は「あすこ（絵）」には、普通の意味での労働ではなく、「労働以上のものがあつたわけだ」と結論している。労働が労働以下にしか見えないということは、労働以上のものを労働と思いこんでいたからだと分かったということである。「駐車場の若者の運転技術<賃金労働<絵の農民の労働」ということではない（エッセンシャル・ワーカーに失礼でしょう）。

問四（文系のみ）

絵の価値は現実のあるがままの人間の生を正しく描く真実性にあるという考えは、言語芸術も書かれた現実自体の側の批評によって初めて規律と価値を得るとみなし、筆者の志向する作品の自律的価値を否認すると思われたから。

* 「絵の価値を決めるのは描かれたものの真実性だ」という「考え」は、「文学作品の価値を決めるのは書かれたものの真実性だ（＝現実自体のがわの批評によってその規律と価値を得る）」ということにもつながる。それは「『言語と精神』の世界」＝「文学（作品・文芸）」の自律的価値を否認すると思われるからである。

* 「『言語と精神』の世界」のままで解答としないこと。もちろん「文学（作品・文芸）」のことであり、「『言語』と『精神の世界』」という二項を指すのではない。

問五

ブリューゲルは天才的な形象把持能力により、個々の現実の精髓を形象化、様式化し、普遍的な姿を彼自身の思想によってだけ統一し、画面上に再創造する。その営みが彼自身の生となることで、作品は現実の生に対して自律的価値を持ちながら、表現に真実性があるという望ましい関わりかた。

* 「(そういう) 現実との幸福な関係」とは、本文全体の読解から、「すると作品とは一体現実にたいしてどういうものとしてあるのだろう」という疑問への、一つの最適解である。つまり、作品が現実の生をきちんと正しく描き出すことに成功しており、しかも、作品は現実にたいして自律的価値をも持ちうるということである。ここで言う「幸福な関係」をブリューゲル個人の人生の満足感のようなものと誤読しないように。本文の真の主題は「現実の生と芸術表現（作品）との関係」である。筆者を「慄然とさせた」のが、「芸術は現実をあるがまま正しく描けさえすればよい」という「考え」であり、「作品の自律的価値」の否認であるから、逆に、ブリューゲルの作品と現実の生との「関係」を「幸福な」ものと言っているのは、作品が現実を正しく描きつつ、しかも作品の自律性を失わないという、対立を克服した理想的な関係を実現しているからなのである。ブリューゲル個人の人生が幸福だなどという話ではない。本文の客観的読解から論理的に解答を演繹するだけである。

* 解答欄が五行以上であれば、二文で書き、構文・表現のミス避けたい。

